

# 楼蘭

井上靖歴史小説集第二卷



井上靖歴史小説集 第二卷

# 楼 蘭

岩波書店

井上靖歴史小説集 第二巻 第二回配本（全十一巻）

一九八一年七月三十日 第一刷発行 ©  
一九八一年九月十八日 第二刷発行

定価三八〇〇円

著 者 井 上 靖

発行者 緑 川 亨

〒100 東京都千代田区一ツ橋二丁目  
発行所 緑 川 波 書 店

電話 〇三・六五五・四二二  
振替東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

## 目次

樓蘭

1

崑崙の玉

55

永泰公主の頸飾り

93

狼災記

121

宦者中行説

151

褒姒の笑い

171

明妃曲

183

古代ペンジケント

223

聖者

僧伽羅國縁起

羅刹女国

古い文字

あとがき

255

285

299

317

363

楼

蘭



往古、西域に樓蘭と呼ぶ小さい国があった。この樓蘭国が東洋史上にその名を現わして来るのは紀元前百二、三十年頃で、その名を史上から消してしまうのは同じく紀元前七十七年であるから、前後僅か五十年程の短い期間、この樓蘭国は東洋の歴史の上に存在していたことになる。いまから二千年程昔のことである。

樓蘭の紹介者は、漢の武帝の頃西域に使し、その功に依って博望侯に封ぜられた有名な冒険家張騫<sup>ちやうけん</sup>である。現在西域地方は大部分中国の新疆省<sup>しんきやう</sup>に包含されているが、当時は中国の西北部に当たる大沙漠地帯で、いわゆる胡族<sup>こぞく</sup>の住む胡地であり、異民族の住む異域であった。ここが東西文化交流の回廊となり、いわゆるシルクロードなる隊商路が走り貫いたのはずっと後世のことである。

武帝の頃は、まだこの沙漠地帯へ足を踏み入れる無謀者はなかった。沙漠の大きさがいかなるものか

判らなかつたし、いかなる種族がそこに住み、いかなる国がそこにあるか知らなかつた。

武帝がここへ張騫を派遣したのは、西域という未知の地への好奇心からでも探検的興味からでもなかつた。未知の沙漠地帯を越えた向うに大月氏だいげつしという大国があり、その大月氏と協力して、強大な勢力を持つて漢をおびやかして続けている匈奴を撃つためであつた。漢では高祖以来五十余年の間、匈奴へ次々と王女を妻めあわし、幣帛を贈り、通商を許していたが、しかも匈奴の侵掠はやむことがなかつたのであつた。

当時中国の歴代の天子は例外なく匈奴の劫掠に手を焼いていた。匈奴は漠北の地を転々として、シベリヤから中央アジアへかけて跳梁する遊牧民族で、性は兇暴剽悍で、隙を見ては南下して中国の辺境を襲つた。飢饉や天災のない年はあつても、匈奴との闘いのない年はなかつた。この匈奴との闘いに、当時の漢もまた士卒も馬匹ばひつも殆ど費い果たしてしまつたと言つていい状態にあつた。武帝が初めて匈奴を討伐した時、匈奴の捕虜の中に一人の胡人があり、その胡人が「匈奴は月氏の王を破り、その頭を酒を飲む器とした。月氏は匈奴を憎むこと甚だしいものがあるが、共に立つて匈奴を撃つ協力者がないので、いかんとも為し難い状態にある」と語つた。これを聞いて、武帝は大月氏に使者を派して、匈奴に対する共同作戦を張ろうとしたのである。そして武帝は大月氏に使者となる人を募集したが、その時それに応じたのが張騫であつた。張騫は紀元前百三十九年に曾て匈奴の奴隸であつた者百余人を率いて隴西郡ろうせいぐんを発して胡地へといつた。その張騫が漢へ歸つて來たのは十三年後で、百余人の従者のうち、張騫と

共に漢土を踏んだのは僅か一人であった。張騫は途中匈奴の捕虜となり十余年を空しく過ごしたが、隙を見て逃れ、漠地を越え、目的地大月氏に辿り着き、使者としての役目を果たし、帰路もまた匈奴に捕えられたが、こんどは匈奴の内乱のお蔭で、そこを逃れ、漸くにして帰国することができたのであった。  
 元朔五年(紀元前一二四年)、張騫は都長安にはいり、武帝に自分が経廻って来た西域諸国の風土、民情、物産等について奏上するところがあった。

この時、樓蘭は、且末、于闐、莎車、焉耆、輪台、龜茲、疏勒等の沙漠地帯の多くの国々と一緒に初めてその存在を中国の歴史の上に現わして来たのであった。『漢書西域伝』は当時の西域を次のように伝えている。——西域は初め三十六国あったが、その後分かれて多い時は五十余国を数えている。そのいずれもが、匈奴の西、烏孫の南にある。南北に天山、コンロンの大山脈横たわり、中央にタリム河が流れている。東西六千余里、南北千余里、東は玉門、陽関を以て漢に接し、西はパミール高原を以て遮られている。

要するに、西域は天山、コンロン、パミール高原の三山脈に挟まれた現在のタリム盆地にあたり、その中央はタクラマカン沙漠を形成し、その沙漠の周辺に、それぞれ別々の言葉と別々の風習と別々の皮膚の色とを持つ異なった民族を収めた小城廓国家が散在していたのである。この西域地方と中国との交通は勿論武帝以前にもあったが、それはすべて民間的なものであり、国家と国家とが交渉を持つようになつたのはこの武帝の時が初めてであった。

玉門、陽関を出るとすぐ沙漠地帯が拡がっている。そしてその沙漠を越えたところにロブ湖<sup>イェル</sup>があった。当時はこの湖を漢人は蒲昌海<sup>ホウシャウカイ</sup>とも塩沢とも呼んでいた。現在のロブノールに何倍かする、湖というより海といった方がふさわしい濃い塩分を含んだ巨大な潮の沢であった。玉門、陽関を去ること三百余里の地点である。タクラマカン沙漠の中で一番の大河であるタリム河がここに注いでいる。

そしてこの湖の西北岸に漢に一番近い国としてあったのが楼蘭である。漢から西域に出る道はこの楼蘭に於いて二つに別れる。一つは南に向かい、コンロン山脈の北麓に沿って行く道で、一つは北へ向かい、天山山脈の南麓に沿って西走する道である。楼蘭から道を南にとると、且末、于闐、莎車、疏勒の国々があって、月氏に通じ、道を北にとると、姑師<sup>コシ</sup>、焉耆、輪台、龜茲の国々を経て、烏孫、大宛の国々に至る。従って、楼蘭は南道を取るにしても、北道を取るにしても、中国から西域諸国に行くには、どうしても、通過しなければならぬ道にあった。

『漢書西域伝』は楼蘭の後身である鄯善<sup>ゼンゼン</sup>国について、「戸千五百七十、口万四千一百、勝兵二千九百十二甲」と報じているが、これに依って楼蘭という国の大体の大きさを想像することができよう。ともかくロブ湖畔の北西岸に人口一万四、五千の小国があったのである。この楼蘭国人は人種的にみるとアーリア人種のイラン系で、色は黒く、眼はくぼみ、鼻は高かった。総体に彫りの深い顔立ちを持っていた、農耕と遊牧と、ロブ湖に依る採塩と漁業とで生活していた。

この国は張騫に依って初めて紹介されたが、勿論、この種族がこの地方に住みついたのは更に何百年

か溯ることになるだろう。漢との関係を持つまで、樓蘭は絶えず匈奴の脅威に曝され、その残忍な劫掠に苦しんでいたが、兎も角それに隸属することに依って、美しいロブ湖畔で、互いに寄り添うような生き方で、この一万四、五千の小種族は生きていたのである。国が小さいので匈奴に反抗することはできなかったが、それでも武器を取ると一人一人は勇敢であった。騎馬の戦闘も巧みであり、車を馭り、弓を射る独特の戦闘法も他種族を怖れさせるに充分なものがあつた。

武帝は匈奴に対して共同作戦を取るために張騫を遠く異域に派したのであつたが、肝心の大月氏の態度がはつきりしないために、その意味では、武帝は張騫の報告から期待したものを受け取ることができなかった。併し、武帝が張騫の話から得たものは、全く彼が予期していないものの中に大きいものがあつた。それは西域諸国というものに対する新しい認識であつた。

匈奴に対する政略的意味からいっても西域諸国は大きな価値を持っていた。これを支配下に置いて匈奴を側面から脅かすこともできたし、その兵力をもって匈奴を撃つことも考えられた。それからまた漠地の小国群は珍奇な財宝の数々を産していた。玉もあれば、琥珀もあつた。金も銀も銅もあつた。塩もあり、胡椒もあり、葡萄酒もあつた。馬も、水牛も、象も、孔雀も、犀も、獅子もいた。果物も豊富であり、五穀も豊かに稔っている。これらの諸国と貿易すれば、匈奴との闘いに疲弊し尽している漢の財政の一端を救うことができる筈である。特に大宛の産する駿馬は、馬匹の補給に苦しんでいる武帝にとって大きな魅力であつた。

武帝はまたその西域諸国の向う側にある幾つかの大国の名前を知った。康居、安息、身毒の国々はどこにあるのか見当はつかなかったが、ひどく大きい国で、国土は数々の財宝で充たされているようであった。特に武帝が興味を持ったのは、大夏の東南数千里にある暑熱の国身毒（インド）であった。そこへは匈奴の脅威なくして通ずることができるということと、その国人が己が国の産する財宝と漢の財物との交換を望んでいるということとを聞いて、そのことが武帝に身毒という国を特殊な国として印象づけたのであった。

張騫が武帝の命を受けて二回目に西域にはいったのは、紀元前百二十二年であった。この時の使命は身毒に至って通交を求めることにあったが、途中西南の蛮族に阻まれて、張騫は目的を達することができないで帰国した。

その翌年張騫は三度西域にはいることになった。この場合は漢軍が匈奴を撃ち、それまで匈奴の勢力範囲にあった敦煌（とんくわう）附近の地を手中に収め、西域への道を確保することができたので、この機を逸（のが）さず、武帝はここに初めて西域諸国との交友關係を確立するために、張騫を胡地に派遣することになったのである。紀元前百二十一年のことである。

樓蘭人が初めて漢の部隊を眼にしたのは、張騫の三回目の西域入りの時であった。その日、城壁で囲まれたロブ湖畔の小城邑は、漢族襲撃の報を得て、上を下への大混乱を呈していた。城外に置かれてある何千という馬匹や駱駝は、尽く、城内に引き入れられ、その上で七つの城門は堅く閉ざされ、城壁の

要所所には限なく武装した男たちが配された。

城壁に登ると、ロブ湖の湖面が一枚の青い布のように静かに見えた。濃い塩分を含んだ、少しの風でも荒々しく波立つ湖がこの日このように静かであることが、人々を不安にし怖れさせた。湖面は岸に近い方が碧に、遠くなるに従って紺青に見えた。城壁から見て北側の湖岸には見はるかすような密林地帯が続いている。殆ど白楊（ポプラ）の林であるが、その間に檉柳（タマリスク）その他の灌木が埋めている地帯があつて、だんだら模様様の自然の織物を造り上げている。南側の湖岸はどこまでも荻や蘆の類が生い茂っていて、何本かの河川がそこに注いでいるが、その河筋は荻や蘆に覆われていて傍へ行かない限り眼にすることはできない。

河筋と言えば城廓の周囲にはやたらに水路が多い。湖北の密林地帯以外の土地は、何里もの間、水路が網の目のように織りなされ、その水路と水路の間に耕地が展けている。水路は人工的なものもあるが、大部分往古の河の跡である乾河道へ、城から一里離れたところを流れているタリム河の水を引き入れたものである。従って正しく言えば、樓蘭は沙漠地帯にはあつたが、ロブ湖に沿っており、地味肥沃なタリム河のデルタ地帯に造られた城邑であつた。

タリム河の北を一本の道が走っている。城壁の上からはタリム河の河筋は、その両側を埋める灌木地帯のために大部分匿されて見えませんが、一カ所だけそのどんよりとした青い姿態を見せているところがあつた。数年前その長い流れの一カ所に異変が起きて、新しい流れの道が作られたが、そこだけが両岸

に樹木を持たないために、天日にむき出しに曝されていた。そしてその流れの岸に、それに並行して走っている道も、また、そこだけ衣服を剥ぎ取られていた。

城壁に上っている楼蘭の人々は、その遠く見える道を豆粒のような人間と動物の隊列がもう長いこと続いているのを見ていた。人間と動物は密林から出て、密林へはいるまで、かなり長い時間を要していた。遠目の利くことで選り出された三人の男たちが城壁の上に立って、隊列を形造っている人間と動物の数を算え、他の男たちはそれを次々に大声で呼ばわって、そこから城壁の下へ、城壁の下から第一の屯所へとといった具合に、次々に漢の部隊の動静を口伝えに伝えて行った。

七十八歳で、この国で一番よく遠目の利く瘦せた老人は、三百人の人間と、それに倍する馬と、それから万を算える羊と牛とを、ひどく小さいその二つの眼に映し取っていた。そして老人は馬の半分がいずれもその背に大きな荷物<sup>あち</sup>の箱を置いてあることを知ると、それまでの緊張していた顔の表情を革めた。いま自分の眼に映っている漢の部隊が決して戦闘を目的とした集団でないことを知ったからである。

急に城内の騒擾は少し変わった質のものになった。併し、差しせまって戦闘はないと知っても、だれも気を許す者はなかった。戦闘配置が解かれ、財宝が穴蔵から出され、馬や駱駝が城外へと戻されたのは二日経ってからであった。それから数日間、楼蘭人たちは漢から西域へはいつて来た大部隊が、なぜこの楼蘭国へ一人の使者も寄越さず、一路西へ進んで行ったかについて噂し合った。

その漢の部隊が楼蘭から道を北に取り、タクラマカン沙漠の北側にある北道諸国中最も勢力を持って

いた烏孫に行き、烏孫と款を通じたこと、更にそこで部隊が数隊に分かれて、大宛、康居、大月氏、大夏、安息、身毒、于闐、扞弥等の国々に向かったこと、そうしたことを樓蘭国王が知ったのは半歳後であった。漢の部隊が匈奴の勢力範囲にある樓蘭や、やはり樓蘭と同様に西域の入口にあって匈奴に隷属している姑師を意識的に避けたことは明らかであった。

そうしたことがあった翌年から、樓蘭人たちは漢の大部隊や小部隊が殆ど毎月のように西行したり、東行したりするのを見た。漢の部隊ばかりでなく、烏孫人の数十人の一団が数十頭ずつの馬と駱駝を連れてタリム河沿いに漢へ向かうのを見たこともあれば、大夏の小部隊が同じように馬と駱駝を連れて、何日間か毎日のように東へ進んで行くのを見たこともあった。樓蘭人たちは、自分たちには無関係なことではあったが、漢と西域諸国の関係が日々密接になって行くのを手に取るようにはつきりと見ることはできなかった。

樓蘭人たちは城廓を出て、それらの旅行者たちを間近に見るために広い耕地を越えて、タリム河の河岸まで出掛けて行くことがあった。こうしたことはこの種族がここへ住みついてから、これまでに一度もないことであった。

樓蘭人たちには匈奴はもう再びこの地方へ姿を見せることはあるまいと思われた。漢が匈奴を破り、匈奴の渾邪王こんやを降伏せしめたということは噂で聞いていたが、それが紛れもない事実であることを信じないわけには行かなかった。旅行者の話では匈奴の根拠地の一つであった酒泉、敦煌には漢の二郡が置

かれ、万里の長城は酒泉まで延ばされ、敦煌の西には玉門、陽関の二関を初め幾つかの烽火台や屯所が築かれ、漢と西域を通ずる廻廊は完成したということであった。

ここに楼蘭は初めて匈奴の劫掠を受けない二年の歳月を持つことができたのであった。

楼蘭が漢から使者を受けたのは、彼等が初めて漢の部隊を見てから三年目の秋であった。使者の趣は、玉門、陽関を出て西域にはいる漢人のために、楼蘭国は適当な人数を出して、沙漠の途中まで糧食と水の補給をするようにという一方的な命令であった。この漢の命令を受け取ったのは、楼蘭ばかりでなく姑師も同じことであった。

楼蘭はこのために殆ど毎日のように多数の男たちを沙漠の中へと送り込まなければならなかった。重い糧食を背負い、水を担って、沙漠の途中まで漢人を出迎えることは大変な仕事であった。匈奴の横暴にも多年苦しめられて来たが、漢の大国としての武力をかさに着た命令も楼蘭人たちには堪え難いものであった。

楼蘭の男たちの何人かが耕地へ出て行く替りに、重い荷物を背負って沙漠の中へ出て行くようになってから一カ月程したある夜、楼蘭人たちは長く耳にしまった匈奴の操る馬のいななきを耳にして眼覚めた。城門を押し開いては行って来た匈奴の十数名の一団は、城内の路地路地を駆け廻り、己が種族がまだ健在であることを楼蘭人たちに示して廻った。馬に跨がっている匈奴の若者たちの槍の尖端には、彼等がいま屠って来た許りの漢兵の首級が刺されてあり、それが血を滴らせながら月光の中に青く光っ